

月刊 ウィーン

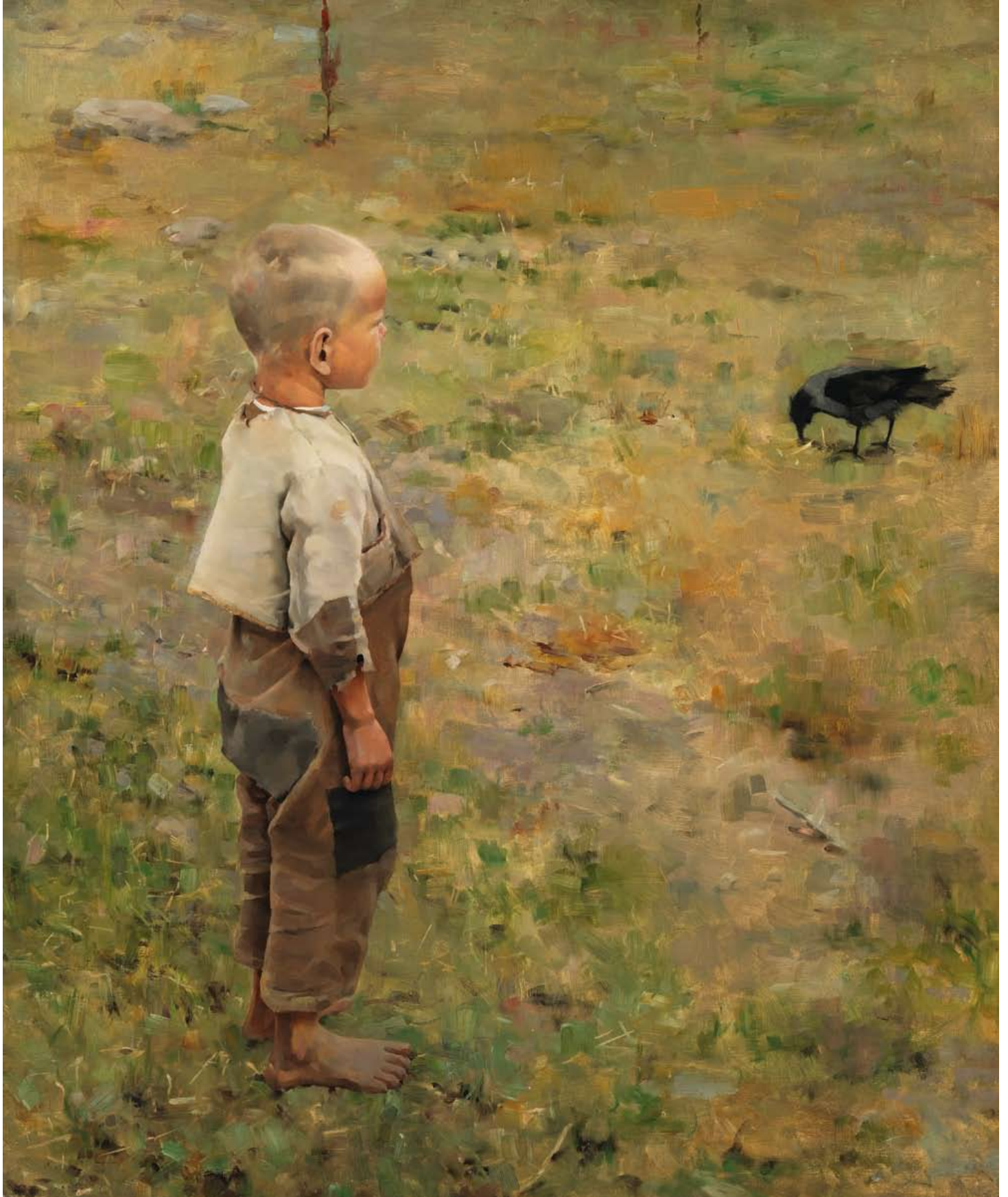
GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊37年目 **Nr. 418**

2025年1月号



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 151

高レベル放射性廃棄物（HLW）の処分問題について知識を深めるワークショップが、二月七日、福井市で開催された。若い世代に「自分事」として原子力問題に一層の興味を持ってもらうために、福井工業大学が中心となって主催しているこのワークショップは、今回で一四回目の開催。この日は福井県内から同大のほか、福井大学、福井県立大学、福井南高等学校から三四名が参加した。

意見交換会の様子
<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/25981.html>



はじめに講師として、日本原子力産業協会の武田調査役および杉山調査役がHLW処分問題について講演。なぜ地層処分方式が選ばれたのか、人間や環境への影響、先行する海外事例などを紹介すると、学生たちは真剣な様子で聞き入っていた。

その後、学生たちは五つの班に分かれ、教育現場などでも用いられるデジタルゲーム、マイクラフトを通してHLWやエネルギー問題への理解・関心をさらに深める取組に挑戦。福井工業大学の学生が考案したもので、ゲーム内でエメラルドを集めていく過程で、次々とクイズが出現し、正解することでポイントを獲得していく。そのポイントの合計数を各班で競い合う仕組み。クイズの答えを導くためには、配布資料を読み返し、同じ班のメンバーとの意見交換が必要になるため、メンバー同士、活発な議論が生まれていた。

また、アイデアバトルと呼ばれる問題が出ると、それぞれの問いを受けて話し合った結果を会場全体に発表するルールになっており、その間はゲームが一時中断される。各班、必ず一回以上、発表のタイミングがあり、さまざまな考え方や意見に触れながら、自分たちのアイデアに活かす訓練になっていた。

例えば、「地層処分を生かしたまちづくりについて、話し合ってください」の問いには、「発電から放射性廃棄物の処分まで、福井県のみで実現できるか？」といった意見が飛び出た。ただ、それに対して「経済性や公平性の観点から全国に分散することも大切で、各県に自分事としてこの問題を捉えてほしい」といった意見もあがった。また、「エネルギー自給率を向上させるために必要な政策や技術、再エネの活用方法を話し合ってください」の問いには、「各個人による省エネ家電の導入などの努力をしつつ、今ある発電施設の有効活用、新型革新炉やアンモニア発電など、さまざまな新しい技術の導入を模索していくべきだ」といった意見が出た。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両地に生きたる動物（その六）を紹介したい。ウィーン市の南東から北西に向かって流れるドナウ川は、ヴォルガ川に次ぎ欧州二番目に長い大河。川幅は場所によって異なるが、平均的には約二〇〇〜三〇〇メートル程度、深さは最大約五〜七メートル程度。ドナウ川周辺には多くの水鳥が生息しているが、今回は主にカモ類について述べたい。マガモは、ヨーロッパ全域で広く分布する最も一般的なカモで、オスは鮮やかな緑色の頭部が特徴で、メスは茶色の羽毛で目立たない色をしている。コガモは、ヨーロッパを含むユーラシア大陸で繁殖し、冬になると渡りを行う。オスは頭部に茶色と緑の模様を持つ。オナガガモは、オスは細長い尾羽と白い首元の模様が特徴的。渡り鳥で、冬季にドナウ川流域に現れることがある。ヒドリガモは、オスは栗色の頭部と黄色い前頭部が特徴的な冬季にドナウ川沿いに現れることが多い渡

り鳥。ウィーンのドナウ川周辺で最も一般的に見られる水鳥はハクチョウ。特にドナウ川やその周辺の水域では、ハクチョウの群れが優雅に泳ぐ姿が頻りに観察される。

一方、京都市内を北から南に流れる鴨川の川幅は、場所によってかなり変わるが、一般的には約二〇〜五〇メートル程度、川の深さは、通常は数十センチから一メートル程度とドナウ川に比べるとかなり小規模である。雨が降って増水した場合には深さが増すが、普段は浅瀬が多く、子どもが水遊びをしたり、飛び石を渡るような風景が見られる。鴨川周辺に生息するカモ類のうち、カルガモは、一年中最も見られる留鳥で、川や池などの淡水域に生息。雑食性で、水生植物や小魚、昆虫などを食べる。繁殖期には河川敷や水辺の草地に巣を作る。川辺で泳ぐ姿や親子で行動する微笑ましい光景がよく観察される。マガモは、冬季に飛来する渡り鳥で、主に水面で採食する。オスは光沢のある緑色の頭部が特徴的。水生植物や小魚、昆虫などを食べる雑食性。コガモは、冬季に見られる小型のカモで、群れで行動することが多い。水辺の草地や浅瀬で採食し、植物の種子や小さな無脊椎動物を食べる。マガモとコガモは、主にシベリアや極東ロシアなどの北方地域から飛来して日本で越冬する渡り鳥であり、冬の鴨川の風物詩となっている。



余談であるが、ウィーンでは冬期にドナウ川の河畔からハクチョウを観察したことがある。京都でも学生時代や教員時代に鴨川に掛かる橋の上から、カルガモを良く見たものである。今月も両地に生きたる動物を紹介することができた幸運に感謝しつつ、ドナウ川に舞うハクチョウの写真を掲載させていただきます。

■ 杉本純 元京都大学教授
 元原子力機構ウィーン事務所長 ■

